

熱戦のエピローグ②

@職業体験

オオスカシバ

「でさー、また『ハカマツカさん』って呼ばれたんだよ」  
塾の授業が始まる前、涼花、桃花、『ハカマツカ』綾音  
の三人は机を囲んでおしゃべりを楽しんでいた。

「しかもさ、袴つてしめすへんでしたっけ？ ころもへ  
んでしたっけ？ ってゼッケン覗いてくる人。衣服なん  
だから衣に決まってるだろ！」

「まあ、私も『サハラ』と間違えられたことあるから分  
かる」

涼花の苗字「佐原」も分かりにくい。

「それに比べて桃花は……」

二人が不満そうに彼女を見た。

「確かに春山って間違いようがないからね。でも、実は  
『シュンザン』です！ とか言ってみたかったな」

「次の練習試合で言ってみたら意外と騙せそう」

涼花が提案した。

「ちよつと無理があるんじゃないかな？」

盛り上がっていると、

「はい、みなさんこんばんはー！」

と先生が入ってきたので、三人は席に着いた。

授業の前に、先生が職業体験の話題を振ってきた。「ジ  
ョブフェスタ」と言い、浜塚市の中学二年生は、五月か

十一月に体験することになっている。涼花と桃花の鈴蔵  
中も来週からスタートする。

先生は一番前に座っている生徒たちに職種を聞いてみ  
た後、自分の思い出話をし始めた。この塾は授業の質が  
よいが、脱線も多い。

ホワイトボードは年号や、「杉井式」と称された、わけ  
のわからないゴロで埋め尽くされ、授業は終わった。三  
人はロータリーで職業体験の話をした。

「二人ってどこで働くの？」

「木漏れ日の湯つてところ。月水金の三日間」

「あー。一角中校区の」

「さすが情報係！」

涼花が言った。

「実は行ったことがあってね。あの湯はよかったよ。筋  
肉痛が嘘みたいになつたし」

「ホント？ 私も肩こり治したい」

「私も腰が……」

「みんなしておばあちゃんじゃないか」

綾音が突っ込んだ。笑いが起こる。

「うるさいよー。近隣住民のこと考えて！」

先生に注意されてしまった。

月曜日、二人で合流してから事業所に向かった。木漏れ日の湯は、鈴藏中から北へ上ったところにある。

「へえ、へえ、しんどい」

二人ともへろへろになっていた。本来歩き通学の二人にとつて、自転車坂を登るのはハードルが高すぎた。ようやく一角中校区に入った。

「角中生って毎日こんなところを通ってるの？」

桃花が息を切らしながら言った。

「そりゃあんなに強くなるわけだよ」

涼花も後ろから答えた。会話に気を取られたので、ハンドルがふらついた。

一角中の女子卓球部は「絶対王者」の異名を持つ強豪校だ。その学校名も強者感を漂わせている。試合会場には横断幕を掲げていて、一角獣のシルエツトとともに、「突き抜ける限界の先まで」と謳っている。涼花と桃花でさえ、歯が立たない選手ばかりである。学区が隣り合っているのだから、比べられるのが辛い。学区が隣り合っているのだから、比べられるのが辛い。

「そりゃあ先生、木漏れ日の湯は角中と合同って言うてたっけ？」

信号待ちで涼花が聞いた。

「そうだったかも。女卓いるかな？」

ブルーギルズの職業病なのか、つい選手を探したくなってしまう。

「ここでも依頼解決？ 仕事掛け持ちじゃん」

「ホントだ。なんか変な感じ」

青になったので一列に出発した。

二人が一番乗りに着いた。会話することもなかった。

木の中からギーギーと鋭い声が出たかと思うと、水色の尾羽を持った鳥が飛び出していった。それに二、三羽ついて行った。二人は目で追った。こんな時、涼花は、（あつ、オナガだ！ あの鳴き方は何を意味するのだろうか？）

と考える。一方で桃花は、

（不思議な鳥。文芸作品の題材にできないかな？）

と考える。二人は似ているようで結構違う。例えば相手がどんなサーブを出そうとするか？ 涼花は研究者気質で、二ゲーム目で得たデータをもとに確率で予測する。桃花は繊細な感性を活かした心理戦が得意で、その場その場で相手の判断を予測する。桃花のパターンを涼花が見抜き、桃花が涼花の分析を欺くことで、二人の技術に共進化が起こり続ける。

二校の生徒が続々と集まり、集合時間を迎えた。担当者も来て、人数確認を始めた。一人ずつ名前を呼んでい

く。

「あれ、イネシキさんはいませんか？」

稲敷さんだど！？ と二人は反応した。あの一角中女卓の「稲敷あみ」なのか？ と。

「桃花、あの稲敷さんかな？」

「珍しい苗字だからそうかもね」

「やっばり間違えられてるね」

「イナシキが正しいのに。この間の大会もそうだったよね」

「あの、イネシキじゃなくてイナシキです」

近くにいた男子生徒が指摘した。

「あっ、本当ですね」

担当の女性が事前資料を見直した。

しばらくして、二人の知っている稲敷さんが来た。

「すみません。道を間違えてしまつて」

自転車を押しながら、稲敷あみが現れた。風を受けたせい、髪がだいぶ乱れている。

「そうですか。大丈夫です。無事着いて何よりです」

開始早々険悪モードにはならずすんだ。

開店前に浴場の掃除をした。女子は三人だけだった。

二人は私語を謹んでブラシを動かした。

（稲敷さんと話したい）

という欲求を抑えながら。

二人は自分の持ち場を掃除し終えたが、稲敷さんはまだだった。

「ごめんなさい。遅くて」

稲敷さんは状況を察したのか、慌てて謝った。そして、急いで床をこすろうとした。すると、あるうことかバラスを崩して尻もちをついてしまった。

「大丈夫ですか？」

二人は思わず声をかけた。

「何ともありません」

「手をつかなくてよかったですね」

桃花が言った。

「折れたらラケット握れませんかからね」

稲敷さんは右手を数回握ったり開いたりした。

「稲敷さん。そういう桃花は台に指を挟んで骨にひび入れたバカですよ！」

「えっ、右手やっちゃったんですか？」

「左手だったので練習はできました。あの時は指がなくなつたかと思いましたが」

そんなこともあったなと思ひ、つい話してしまつた。

「ていうか、稲敷さんに何教えてるんだよ！」

桃花は涼花に詰め寄った。

「あんなにうれしそうに話してたのに？」

痛いところを突かれ、何も言い返せなかった。それを

見て稲敷さんは笑っていたが、どこか疲れたような、無理した笑いだった。

ロッカーの掃除も、やっぱり稲敷さんがビリだった。またも謝ってきた。必ずビリはいるのに、なぜここまで気にしているのか、二人は不思議に思った。

午前中は女子が受付を行った。三人は人数のカウントやら、お土産の袋詰めを手伝った。稲敷さんは上手くレジ袋を広げられず、パニックになってしまった。客も職業体験であることを理解していて、

「ゆっくりでいいのよ」

と優しく語りかけていた。しかし、相当気まずかったのか、彼女は客と目を合わせることができなかった。

「これから昼休みにします。温泉卓球もしていいですが、お客さんの迷惑にはならないように」

この時の二人の心中は、  
(ブラボー)

という感じだった。

二人は会話をしながら弁当を食べていたが、温泉卓球の件のせいかわ、箸の動きがハイペースになっていた。稲敷さんはこちらに絡んでくる様子はなかった。桃花はそれに気づいた。

「稲敷さん、一緒に食べませんか？」

「いいんですか？」

「ぜひ！」

「ありがとうございます。学校違うから声かけにくくて」  
「卓球部でゆっくりじゃ仲間ですから」  
涼花も乗り気だった。

昼食を終えると、三人は一目散にゲームコーナーへ向かった。その時、二人はあることに気づいてしまった。

「すみません、私たち接待プレイヤーになっちゃうかも  
しません」

「接待プレイヤー？」

涼花の言葉に、稲敷さんは首を傾げた。

「ラケットを学校に置いて来ちゃったんです」

部活の道具は学校に預けてよいというルールになっていた。

「ほら、こういう素人向けの施設って『粒』置いてない  
じゃないですか」

桃花が言った。二人して特殊なラケット、粒高主戦中国式を使っている。レンタル用でこれを置いている所はない。打ち方も球の性質にも癖があり、初心者がこれのレシーブを受けた場合、相手コートにまず球を返せない。だから需要がないのだ。

「自分の戦型じゃないから、自然と弱体化して初心者レ

ベルになっちゃうんです。体育の時には便利ですけどね」

「なるほど。初心者と対等だから接待プレイヤー」

稲敷さんは理解できた様子だった。

「面白いですね」

「面白いも何も、ひねりのない名前ですが」

桃花が謙遜して言った。

「命名は鈴木中女卓のポエマー、春山桃花が担当しました！」

涼花が口をはさんだ。

「ポエマーじゃない、詩人だ！」

「どっちも同じじゃん」

「私は、詩人の方が気品があつて好きです」

稲敷さんがぼつりと言った。

「ほらー、稲敷さんも詩人の方がいいって！」

桃花は勝ち誇った様子だった。

二人が接待プレイヤーだったこともあり、三人はほかの客を驚かせることなく、大人しくプレーをした。こんなところで卓球部員三人が暴走したら、お年寄りが腰を抜かしてしまうだろう。味気ないプレーになってしまったものの、作事中に活気のない稲敷さんが活き活きして見えた。

というのは一瞬のことで、午後の仕事が始まると、ダメ人間に戻ってしまった。洗い物で皿を割り、かなり落ち込んでいた。スタッフも元気づけようと、「結構あるあるなのよ。毎年一人はいるし」と言っていたが、当の本人は、

(私がその一人になっちゃったじゃないですか！)

と言わんばかりに下を向いたままだった。二人は何かがおかしいと思つた。この一年で、稲敷さんの試合会場の姿を見てきた。普通に試合をし、結果を本席に届け、審判も間違えずにこなしていたはずなのに……

その日の仕事が終わつた後、稲敷さんが話しかけてきた。  
「ごめんなさい、足ひっぱっちゃつて」

泣きそうな声だった。こんなの稲敷さんじゃない！いつもの彼女が一角獣なら、今の彼女はロバという具合だ。「もっと自信を持つてよ」と声をかけたところだったが、付き合ひの浅い間柄ゆえに、無責任な発言をすることもできなかった。

「私、卓球が強いだけで他はダメダメで」

蚊の鳴くような声で言った。

「仕事したらミスするし、不器用で使い物にならないん

です。脚光浴びるのは試合の時だけですな」  
今度は明るく言った。自虐を楽しんでいる稲敷さんが  
気の毒に思えてきた。

その夜、涼花はラケットを磨きながら、稲敷さんのこ  
とを考えていた。どうしても彼女が自分と重なってしま  
う。

「佐原さん、先輩に仕事させないの！」

「佐原さん、今のは『レット』でしょ！　なんでプレー  
を止めさせないの？」

「ボールが切れる前に補充しなきゃ意味がないの！　球  
出しが止まって時間の無駄！」

去年の今頃は、自分が稲敷さんだった。好きで怒られ  
ようとなんて思っていないのに、何かするたびに怒られ  
た。自分がどんくさいから、それだけだということは何  
かりきっていた。けれど、生まれ持った自分の性質を変  
えることなんて、DNAでも切断されない限り不可能だ。  
詰んだと思った。

それなのに、今は全く怒られることもない。審判がで  
きない人は試合に出せないと言われていたが、今は部内  
一位だし、先輩よりも多く試合に出させてもらっている  
くらいだ。何の不自由もない。

先天的なステータスに抗い、自分を変えさせてくれた

ものは何だったのか？　それが分かれば、稲敷さんの力  
になれるのではないかと思った。

その時、誰かが部屋のドアをノックした。受話器を持  
った母親だった。

「塾から電話、杉井先生みたい」

夜中に騒いでしまった件がよぎり、出るのが怖かった。

「もしもし？」

「こんばんは！　こちら白翼館ゼミ講師の杉井と申しま  
す。今電話に出てくれてるのは涼花さんで間違いないか  
な？」

「はい、私です」

「ジョブフェスお疲れ様！　早速ですが期末までちよう  
ど一か月です。今回の目標は決まっているかな？」

テストの戦略会議だと分かったのでほっとした。

「えーと。前回トップテンから脱落してしまったので、  
とにかく順位を戻すことです。やはり数学の最終問題が  
鬼門ですかね」

「まあ、毎年問題見せてもらってるけど、あの先生は意  
地の悪い出題をするからね」

いつも適当に答えを書いて終わってしまうことに、同  
情した。

「涼花さんは基本問題なら解けるんだから、あとは応用  
力。数学組が色んな学校の難問詰め合わせプリントを用  
意してくれると思います。部分点から稼いでいきましょう

う

「ありがとうございます！」

「部活も大変だと思うけど、涼花さんならもったいい点が取れると思います。我々講師は文武両道を全力サポートしていきます！」

（それだ！ ついに思い出した）

と涼花は思った。勉強も部活も、不自由のない生活を送ることだ！

ある時、やはり何かミスをした。すると先生が、  
「勉強だけでもねえ……」

と言った。初めてのテストでトップテン入りし、すごくうれしかった。塾にも名前を掲示してもらった。みんなに羨ましがられた。不自由のない中学校生活のピースを一つ手にしたばかりなのに……また怒られたという落胆ではなく、湧き上がってきたのは怒りだった。それは自分に対するものだったのか、学年上位者のプライドを踏みにじった先生へのものだったのか。どっちも正解だった。

（理想の中学校生活をこんなつまんねえことに汚されてたまるかよ！ 選手になれない以前に出させてもらえないってどういふことだ！）

これが本音だった。気が付いた時には今に至っていた。守りたいものがあつたから、クズから脱出できたのだから。稲敷さんは、社会性はクズだけど、卓球は強い。つ

まり……

水曜日、二人はまた木漏れ日の湯へ向かった。

「稲敷さん、今日もあんな感じなのかな？」

桃花が聞いた。青信号の点滅が赤になった。

「ねえ、そのことで提案があるんだけど」

「なにになに……うん、涼花らしいな」

「放っておくよりは、つて思つて昨日考えてたんだ」

「稲敷さん相手ならうまくいきそうかも」

二人は作戦を実行することにした。

掃除に向かう前、女子用控室に荷物を置きに行く。その時から既に始まっていた。

「あつ、やっぱ、ラケット持ってきちゃった！」

涼花がわざとカバンからケースを出して言った。昨日から密かに用意していた。稲敷さんが反応して涼花の方を見た。

「ま、多分問題ないしいいか。稲敷さん、今日はガチの勝負ができそうですね」

涼花は開き直つたという体を装って芝居を打った。

「はい、よろしくお願いします！」

彼女は満面の笑みを浮かべていた。

「なんだかやる気が出てきたぞ！」

涼花がわざとらしく肩を回した。

浴場に向かう途中、今度は桃花が、

「三人しかいないんですから、ちよつと遊んじやいません？ 掃除ビリだった人は昼休み試合なしっていう罰ゲーム付きで」

「楽しそうですね。やってみたいです」

リスクを背負っているはずの稲敷さん本人が賛同した。

稲敷さんは昨日とは違った。身軽そうに自分の持ち場を片付けて行った。二人が時々作業を止めて腰をたたいている間にも、休むことなく進めていた。手加減してあげたわけではなかった。

試合お預けは、ラケットを持ってきていない桃花に決まった。稲敷さんほとてもうれしそうにしていた。

「すごく調子がいいっていうか、ずっとアドレナリンが出ている気がします。なんでもできちゃいそうです」

「職業体験でこんなこと言うのも変ですけど、試合のいい準備運動になりましたね」

涼花が汗を拭きながら言った。

休憩時間、桃花は洗面所で涼花と二人きりになった。

「メカニズムがよく分からないけど、上手くいってるじゃん」

「どう？ 合法ドーピング実験。稲敷さんみたいな強者選手には効くと思つて」

「でも、よくそんなの思いついたじゃん」

「私も去年の今頃はあんな感じだったじゃん？」

「うん。ミスばっかだったね」

「でも、今は普通。どうして変わったんだらうって思い出してみた」

涼花はハンカチをしまうと、櫛で髪を梳かし始めた。

「陸上であんなだったから、成績というものに困らない中学生を送りたいって思つてた。せつかくテストで上手くいってたのに、部活じゃ先生からダメ出しの嵐。勉強ができて、試合にも出られて初めて私の中学校生活が充実する。半分損してるみたいで自分が許せなかった」

「でも、それが稲敷さんどう関係があるの？」

「稲敷さん、卓球してる時は普通でしょ？」

桃花は黙って頷いた。

「部活は充実しているんだから、それ以外でだつて思つた。卓球の話題と、競争要素を与えて試合に近い条件にすれば、仕事力も上がるんじゃないかって仮説を立てたんだ」

「分かってきた気がする。でも、一時的な変化に終わっちゃうんじゃない？」



「もちろん続きは本人次第。ヒントになればってだけだし」

「涼花と同じことに気づけるかってとこか」

「そういうこと。だから今日だけにしとく」

受付業務で、稲敷さんは商品を見ている人を目にしただけで、レジ袋を用意して待つようにしていた。不器用なのは仕方がない。だから、行動を先読みしてやるんだというように。読み通りに客が来ると、袋を開く手間が省けたおかげで、早く詰めることができた。その一方で客が去ってしまうと、

「買ってくれませんでしたね」

と三人で残念がったりもした。昨日は自分との戦いで精いっぱいだった彼女が、コミュニケーションを取りながら作業をできるようになっていた。昼食の話も三人で盛り上がった。桃花が稲敷さん手作りの卵焼きの出来栄えを見て、

「上手いですね！ うちのお姉ちゃん巻くのにも苦戦してますよ」

と褒めると、嬉しそうにコツを説明し始めた。

「結構器用じゃないですか」

桃花がさらに褒めると、

「卵焼きくらいしか作れないですよ」

やっぱり自虐気味に言った。

和やかなムードが一変、涼花と稲敷さんが台を挟んでにらみ合っていた。そう、ジョブフェスの裏目的、試合の始まりだった。審判の桃花も、その殺気のせいか若干のけぞっている。

マイラケット、マイシューズ、完全装備の二人が熱いレシーブを続けた。攻撃型の稲敷さん、耐久型の涼花の一騎打ち。となりの台で遊んでいた男子たちも、手を止めて見入っていた。一進一退の攻防に思えたが、プレーが進展していくと、稲敷さんが本領を発揮した。意図的に涼花が返球を苦手とする場所ばかりねらう。ついに彼女のマツチポイントを許してしまった。涼花は短期戦に弱い。審判をしつつ心で応援していた桃花も、  
(ここまでか)

と思った時だった。

「おう、若いのだ。いい試合をしているなあ」

三人に話しかけてきたのは、眼鏡をかけた、客と思わしきおじいちゃんだった。

「こんにちは！」

三人そろって挨拶をした。

「今年も職業体験の時期か」

そのおじいちゃんはミズタニさんといい、毎日木漏れ

日の湯に通い、仲間がいたら卓球をして帰るといいう日々を送っているようだった。

「あいにく今日は一人でねえ、よかったら混ぜてくれな  
いかね？」

不審者という感じではなかったので、四人でやることにした。交代でラリーの相手をした。桃花も、接待プレイヤーとして参戦した。日課にしているだけあって、なかなか上手かった。

「君たちを見ると、なんだか懐かしい気持ちになってね、私が卓球部だった時のことを思い出すねえ」

ミズタニさんははさも満足げに言った。  
「とはいえ私のころは戦時中で、対外試合なんかできたもんじゃなかった」

「そうだったんですか……」  
涼花は肩を落とした。

「二〇一六年の世は平和だ。君たちは恵まれている。しかし、これから先も続くという保証はない。卓球部での日々を大切に生きるんだ」

「試合ができなくなるような事態。想像つかないですね」  
稲敷さんは腕を組んで考えたが、何も思いつかなかった。

「軽い冗談だ。そんな深刻に考えなくていい」  
「そうですよね！」

それ以上考えるのは、それこそ時間の無駄なので、や

めにした。

「それじゃあ、明日もひと風呂浴びに来ようか。若者たちよ、頑張るんだぞ」

そう言っただけで帰っていった。

そのあとも稲敷さんのペースは乱れることなく、二日目はハッピーエンドに終わった。

「今日は楽しかったよね」

「明日は決着つけたいな！」

「もう、これじゃあ職業体験なのか大会なのか分からないじゃん！」

「桃花はまじめだなあ！」

気づけば仲良し三人組になっていた。最終日もハッピーエンド！と思ったが、ビツクな試練が待ち構えていた。

最終日、三人は広告の配送準備を終え、控室へと向かっていた。この日はほとんど客がおらず、

「おなか減ったー」

と、ちよつと大きな声で会話しながら歩いていたその時だった。

「人が倒れてるぞー！ 誰かー！」

男性浴場の方から聞こえた。

「マジで？」

二人がそう呟いた瞬間、稲敷さんの目つきが変わった。

「涼花は近くの大人に百十九番を頼んで！ 桃花はAEDを！」

そう言うなり、稲敷さんは浴場の方に突き進んでいった。

二人は何が起きたのか把握しきれていなかった。ただ、何としても稲敷さんの命令に応じるしかないと思った。

稲敷さんは倒れている男性を見て一瞬血の気が引いた。ミズタニさんだった。近くに落ちていたかばんから、おととい見たラケットケースが顔をのぞかせていた。

「私に診させてください！」

彼女は横に膝をつき、反応を確かめた。応答がなかった。すると、すぐに心臓マッサージを始めた。

（涼花、桃花、お願い。早く来て！）

本当はすごく怖い。一生懸命やりかたは覚えたけど、これで合っているのだろうか……

「あみ！ 持ってきたよ」

二人とスタツフがかけつけた。

「通報もしたよ！ あみ、私たちにできることはある？」  
桃花が聞いた。

「私が指示を出すから、桃花はAEDをセットして！ 涼花は私とマッサージを変わってもらえるかな？」

稲敷さんはてきぱきと指示を出していった。涼花はなかなか力が入れられなかったが、スタツフが補助してくれた。

「ショックが必要です」

AEDの音声が流れた。みんなが離れ、電気ショックが流れた。すると、ミズタニさんがうなり声をあげ、体を動かした。やがて、目をゆつくりと開けた。

「おお、昨日の若者たちか」

意識を失ったものの、脳にダメージはなさそうだった。そのあと、救急隊がかけつけ、検査を受けるために搬送されていった。

「なんとかうまくいきましたね」

そう言うのと、疲れ切ってしまったのか、稲敷さんは膝から崩れ落ちた

「大丈夫？」

桃花が手を差し伸べた。

「自分で自分に腰を抜かしちゃって」  
そう笑うと、自力で立ち上がった。

「きつと二人に出会わなかったら、自分から助けに行けなかったと思う」

「そんな、私たち何もしないよ」

涼花がとんでもない、という風に即答した。

「二日目に競争をして、気づいたんだ。私って、使えない、弱い人間だと思ってたけど、卓球のこととなると途端に強くなる」

軽く屈伸をしながら言った。

「失敗した時、弱い自分に強い自分が負けちゃうから、自信を失って負のスパイラルに入っちゃうんだって。こんなのおかしい、人生半分損してるじゃないかって思ったの」

桃花が、涼花の肩を肘でつついた。そして耳元で、

「よかったじゃん。伝わったみたいだよ」

と囁いた。

「私、守りたいものがあるから、ずっと強い自分でいきやって思ったの」

「あみの守りたいものって何？」

涼花はもう興味津々だった。

「看護師になりたいって夢があるの！」

ああ、だからあんなことができたんだ、と二人は納得した。

「頑張って知識は増やしてきたけど、性格のせいで親からは『どうせ無理だ』って反対されてた。自分にはできるんだって強く思ったら、試合してる時みたいな自信が湧き上がってきた」

涼花による「合法ドーピング実験」は成功したみたいだった。

「きつと私、部活するうえで大切なことを忘れちゃったのかな？」

「何を？」

桃花が聞いた。

「学校柄、試合で勝つために強い心を持たなきゃって思うようになった。でも、それが目的じゃないんだなって」

二人の前に立っているのは、試合の時のように、頼もしい彼女だった。しかし、力の入りすぎていない、一味違った稲敷さんだった。

「ジョブフェス、成功ってことで！」

三人はハイタッチした。

「あれ、看護師になりたいのになんで木漏れ日の湯？」

涼花が聞いた。

「私、じゃんけん弱くて」

「次はじゃんけんの修業をした方がいいかもね」

涼花はそう言って、ちらりと桃花を見た。

(なんのことかな?)

という風に桃花はそっぽを向いた。

ミズタニさんはその後、快方に向かったという。三人は、土曜の部活後にお見舞いに行った。

「本当にありがとう。君たちにお礼をしたいんだが」

「いや、ただ当たり前のことをしたただけなので」  
稲敷さんは首を振った。

「お気持ちだけで十分です」

涼花も遠慮した。消防署からも、感謝状を手渡したいとの話をもらっていたが、それも遠慮していた。そして、学校に報告することも。

病室のドアをノックする音が聞こえた。入ってきたのは彼の奥さんだった。

「あなたたちがお父さんの命の恩人なのね。本当にありがとう。これ、ほんのお礼ですが、ぜひ家族で食べてください」

そう言って、三人に紙袋を手渡した。

「新雪堂のラスクじゃないですか！ こんなにもらっちゃっていいんですか？」

桃花が聞いた。

「息子が新雪堂の関係者なのよ」

奥さんがこっそりと教えてくれた。

「幸恵、俺のは？」

「懲りないわね。今度は糖尿病にでもなりたいの？」

「えーと、それは、その……」

妻にはかなわないみたいだ。それから彼女は、彼の悪しき食生活をぐちぐちと暴露していった。必死に助けた三人も、

(そりゃあ自業自得ですね)

とあってしまうものだった。それでも最後には、  
「無事でよかった」  
と言ったのには、夫婦の絆を感じた。

それから一週間後、先輩よりも早く朝練に来た二人が倉庫を開けると、ボックスの中のボールが増量されていた。不思議に思いながら、籠にすくった。

顧問によると、匿名で寄付されたものらしかった。箱の上には、

(貴校の生徒たちのおかげで今日という日を生きています。ほんの少しですがお礼をさせていたくださいました)

という内容の手紙が添えられていたそうだった。二人は、

(きつとミズタニさんのことだろう)

と思った。部内の誰もが、まるで命を扱うかのように丁寧にボールを扱っていた。後輩たちも、踏みつぶさせまいと、球拾いに気合を入れていた。

このサブライズは稲敷さんの一角中にも届けられた。顧問が手紙を読んでいた。部員は黙々と練習に取り組んでいる。

「一旦集合！」

顧問が全員を集めた。

「く〜という手紙とともにボールが寄付されました。何

があったのかはよく分からないけど、君たちの試合に勇気づけられた人がいることは確かだ。勝つことだけを考えるのではなく、誰かに希望を与えるプレーをしてほしい！」

(その推測、間違ってるけど、ま、いっか)

稲敷さんは笑みをこぼしてしまった。

「稲敷、何を笑っている？」

顧問は怒るわけではなく、どうしたどうした？ という風に聞いた。

「なんかうれしくて」

自信に満ちた笑顔で言った。顧問はそれを見ると、「良くも悪くも、一人の行動によってチームのイメージは決まるんだ。君たちが動けば、やがて一角中の信頼向上にもつながる。自分には何ができるか？ それを考えて行動につなげてほしい」

そう伝えた。

綾音には、ジョブフェスで起こったことを報告した。そして、ある提案をした。

「ねえ、今度からはき、練習試合で当たるとか関係なく、卓球部員なら誰でも依頼できるようにしようよ！」

涼花が言った。

「稲敷さんみたいに困ってる人はたくさんいると思うん

だ。もっと色々な選手の力になってあげたい！」

桃花も意思を伝えた。

「うん。そっちの方が平等でいいかも。あんまり練習試合しない学校もあると思うし」

綾音は賛成した。

「それじゃあ方針変更だ！」

「オー」

近所迷惑にならないように小さな声で言った。とはいえ、何人かの塾生は、

(何してるんだこの人たち)

という風にチラ見をしながら通り過ぎて行った。

おかしな卓球部集団、ブルーギルズの活動はまだまだ続く。